

古代中国をとりまく胡漢諸民族の服飾に関する調査研究
Research on Clothing of Han and Hu Peoples around Ancient China

石松 日奈子^{*1+}, 中川原 育子^{*2+}, 影山 悦子^{*3+}
Hinako Ishimatsu^{*1+}, Ikuko Nakagawara^{*2+}, Etsuko Kageyama^{*3+}

*1 清泉女子大学文学部 東京都品川区東五反田 3-16-21

Faculty of Literature, Seisen University,

3-16-21 Higashigotanda Shinagawa-ku, Tokyo, Japan

*2 名古屋大学文学研究科

Graduate School of Letters, Nagoya University

*3 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター

Japan Center for International Cooperation in Conservation,

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: : Through examination of ancient art and archaeological material found in East and West Asia, and improvement of baseline data for research, this study aims to clarify various characteristics of clothing of Han and Hu peoples. In our second year of the project, we have researched donors mural paintings depicted on rock cave temples, clothing materials found from tombs and archaeological sites in Xinjiang and Gansu.

はじめに

本研究は中国、東トルキスタン（新疆）、西トルキスタンの3つの領域に分布した胡漢諸民族の服飾の実態解明に向けて、現存する美術作品や考古資料を実査し、研究の基礎となるデータを整備し、それぞれの民族の服飾の特徴を文献と作例によって明らかにすることを目指す。

平成21年度は、北方系胡人（匈奴、鮮卑など）と中国の北方地域や中原に定住した西方系胡人の中国内地における動態に合わせて調査地域を選定、胡服資料の実地調査を行った。研究2年目の22年度は地理的に中国内地と西方地域を繋ぎ、軍事・政治的、経済的拠点となって栄えた、甘粛省、新疆ウイグル自治区のオアシス都市にある石窟寺院と考古遺跡、墓葬資料を調査した。新疆ウイグル自治区のトゥルファン、クチャの地域は、在地胡人の系統を主として、漢系、回鶻系、ソグド系、突厥系といった多民族が混住、共生した地域である。一方、甘粛省の敦煌は漢人文化圏の最西端にあり、中国西域経営の重要拠点の一つであった。

これらの地域に共通する特徴としては、石窟寺院壁画の中に多くの供養者像が描かれているこ

*1) ishimatsu@athena.ocn.ne.jp

と、墓葬出土品の中に衣料資料が豊富に残されているという点にある。供養者像は、どういった民族が何を願って石窟造営に関わり信仰を深めていたのかを伺うことができる貴重な資料である。石窟という宗教的場に描かれた供養者の服飾や容貌を仔細に観察し分析することによって、多くの情報が得られた。また、乾燥した砂漠地帯でもあり、今から 3000 年前の衣服でさえ良好な状態で発見されるなど、実物の服飾資料の宝庫ともいえる。特に新疆地域は古くから織物や染色工芸技術が高度に発達し、多種多様な材質と洗練されたデザインの服飾品が多数出土しており、直接その作例に触れることで、材質や技法、構造、ファッションなど多方面にわたって多くの知見を得ることができた。

研究の方法

平成 22 年度は、新疆ウイグル自治区と甘粛省の石窟寺院壁画、および墓葬より出土した服飾、考古資料を実査した。今回は石窟壁画に描かれた供養者の服飾だけではなく、説話図中にしばしば見られる胡服装人物と漢装人物の描き分けにも注目して観察した。これらは、紹介されている図版や報告が部分的であること、新疆および甘粛の石窟寺院、博物館展示資料の写真撮影は原則許可されなかったため、今回の現地調査では研究分担者間で手分けして時間の許す限りメモとスケッチをとった。現地調査で得たデータや情報はパソコンに入力し、データベース化して整理保存する作業を進めている。これと並行して服飾、民族の特徴を記した文献記録を拾い出して入力し、研究の基礎となるデータを整備する作業を前年度に引き続き継続している。このデータをもとに各地域の服飾状況を分析し、各民族の共生関係、支配・被支配者の身分の上下による服飾の差異などについて研究中である。

平成 22 年度の活動と成果

◆22 年 5 月 8 日 出光美術館（分館）で調査

出光美術館所蔵の唐俑のうち、加彩木俑 4 体（参考文献 1）、陶俑 6 件を調査した。陶俑では簡略化されがちな細部が加彩木俑では繊細に表現され多くの情報を汲み取ることができた。

◆22 年 7 月 30 日～8 月 13 日 中国調査（新疆ウイグル自治区、甘粛省）

（1）クチャ周辺の石窟寺院（新疆ウイグル自治区アクス地区拜城県と庫車県）

クチャの郊外に多数ある石窟寺院の中からキジル石窟計 20 窟、キジルガハ石窟計 4 窟、クムトラ石窟計 11 窟を実地調査した（参考文献 2）。クチャは古代の亀茲国に当たり、供養者のほとんどは亀茲人であるが、説話図中の商人には亀茲人以外の胡服装も登場する（図③）。クムトラ石窟では亀茲人供養者以外に漢人、回鶻人供養者などが見られた。

亀茲人の風貌や服飾は他地域の民族とは異なった特徴を示している。すなわち、髪型は眉の上で短く切りそろえ、中央で左右に振り分ける。『隋書』や『旧唐書』によれば、王族のみ長髪で、俗人は肩の上で短く切りそろえたとある。実際の壁画でもこの点は確認されるが、俗人でも長髪の事例がみられる場合もある（図①）。

王族と一般世俗人物はその服装から観てそれとははっきり区別できるほど差異が表現されている（図①、図②）。図②をみると、王侯男性は開襟で左衽、ラップ状の袖のついた長衣を纏う。両側には深いスリットを施し、かなりデコラティブなデザインとなっている。腰にベルトをつけ、布の付いた小刀やハンカチのような布をつりさげる。女性は男性同様開襟で左衽、ラップ状の袖のついた長衣を纏うが、ドレスのように裾が大きく広がっていること、ベルトを付けないという特

徴がある。王族以外の身分の低い俗人の服装は片側に襟を開き、中央で打ち合わせた長衣を纏い、袖や襟の扱いがシンプルに処理されている（図①）。

（2）トゥルファン（新疆ウイグル自治区吐魯番市）

2009 年末に新装オープンしたトゥルファン市博物館の常設展示とベゼクリク石窟を調査した。そのほかに、高昌故城、アスターナ古墓遺址にも足を運んだ。これらの場所から 20 世紀初頭、イギリスのスタインや日本の大谷探検隊、ドイツのトゥルファン探検調査隊が多くの文物を持ち去っている（図⑤）。ベゼクリク石窟では、回鶻人が主流であるが（図④）、蒙古人、突厥人の供養者像も知られている。ベゼクリクの請願図には仏陀を供養する胡人商人を描いた壁画がいくつか知られ、その中の一例をみると（図⑤）、衣服の基本的構造は同じだが、瞳や髪の色、髪型などで描きわけが見られる。前髪を眉の上で切りそろえる胡人は、亀茲回鶻供養者を想起させる。

（3）新疆ウイグル自治区博物館（新疆ウイグル自治区烏魯木齊市）

新疆ウイグル自治区博物館は、常設展に加え、「瀚海霓裳—西域服飾的記憶—」と題した服飾を専門に扱った展示が新たに設けられていた。修復を終えた衣料が多数展示されており、3000 年前のものから現代まで、新疆の服飾の歴史や近年の研究成果が一望できた（参考文献 3、図版⑥）。

（4）敦煌莫高窟石窟（甘肅省敦煌市）

敦煌莫高窟は、供養者像を描く石窟の中から、北涼～五代・宋までの各時代を代表する石窟の中から 30 窟を厳選し調査した。敦煌は、支配者である鮮卑系氏族と被支配者の在地の漢人豪族、西方系胡人とが共生する地域であり、その関係性は複雑であったが、服飾研究によって次第に明確化されつつある。その中で 5 世紀後半から 6 世紀にかけての動向について紹介する。まず、北涼時代とされてきた第 275 窟は、供養者の服飾分析から鮮卑服を着た人物群像（図⑧）であることが明らかとなり、北魏時代の石窟とみなすべきとの見解が当研究班研究代表者の石松から出された。さらに石松は、第 285 窟の北壁の供養者像と供養題記の研究を実施し、高位の漢化した胡族、あるいは漢族、在地漢族の有力氏族（陰氏）とソグド人女性（史姓）の混成集団、胡族（滑氏）が、それぞれ時期を前後して寄進し制作させたプロセスを明らかにしている（参考文献 4、図版⑦）。この研究によって、北魏後期以降女性は胡族出身であっても漢服を纏い、男性は漢服、胡服の両方が着用されていたことになる。見た目には漢服を着ていても、軽々に漢人とは断定できなくなる。さらに、これまでひとくくりに胡服とされてきた服装も、大きく二種の系統の存在が明らかになった。すなわち、垂れの付いた鮮卑帽をかぶり、スリットの付かない交領の長衣を纏うタイプ（図⑧）と円領に中央で左右に開く作りの長衣をまとう男性胡服のタイプである（図⑨）。前者は鮮卑系胡服の系統であり、後者は西方系胡服の系統で、その出現は西魏以降でないとは出てこないことも指摘されている。

◆23 年 2 月 10 日～13 日 韓国調査（ソウル）

（1）韓国国立中央博物館

韓国国立中央博物館アジア部長の関丙勲氏の協力を得て、1916 年 5 月に二楽荘より朝鮮総督府に送られた大谷コレクションの中から、服飾研究に有益と判断された 9 件の文物に厳選し調査した。一部の作品の寸法に関して公開されているデータとの齟齬が確認されたので、データの修正を行った。特別展「シルクロードと敦煌」（参考文献 5）が開催中であり、新疆の文物が数多く出陳され、現地調査においても目にすることのなかった木俑、陶俑、服飾資料を集中的に観察し記録することができた。

(2) サムスン美術館 Leeum

サムスン創設者が収集したコレクションの中から仏教美術、工芸品を中心に調査した。

参考文献

1. 八波浩一：「中国木俑資料集成と唐代木俑考試論一付・加彩官人（女）木俑像修理報告」『出光美術館研究紀要』第6号、pp. 175～210（2000）
2. 中川原育子：「クチャ地域の供養者像に関する考察—キジルにおける供養者図の展開を中心に—」『名古屋大学文学部研究論集』哲学45、pp. 89～120（1999）
3. 阿迪力・阿布力孜：『新疆古代服飾芸術』新疆新華書店（2009）
4. 石松日奈子：「2009年度龍谷大学史学会総会講演録 敦煌莫高窟第285窟北壁の供養者像と供養者題記」『龍谷史壇』第131号、pp. 43～87（2010）
5. 韓国国立中央博物館：『シルクロードと敦煌展』カタログ（2011）